

人類はいかにして言葉を獲得したのか？

コミュニケーション論をライフワークとする自分だけに、新聞の書評欄で「言葉はなぜ生まれたのか」のタイトルが目にとまり購入し積読していたが、つい最近、この著者のインタビュー TV 番組「はじまりはラブソング」があり見て、急いで本の方も読んだ。

著者は、「人類はいかにして言葉を獲得したのか？」という物的証拠がないヒトの進化史上の最大の謎である「言葉の起源」を、言葉を獲得する以前の動物たち（身分によって鳴き声を変える珍獣「ハダカデバネズミ」、仲間内で20種類近い鳴き声を使い分ける南米産のネズミ「デグー」、様々なフレーズを繋ぎ合わせ、一羽一羽が独自の求愛の歌を囀る「ジュウシマツ」、鳴き声を組み合わせて意味ある発声をする「ミューラーテナガザル」、泣き声で親をコントロールする「ヒトの赤ちゃん」）を観察・実験から、「言語の起源は求愛の歌だった」という独自の大胆な仮説を証明しようとし、世界から注目を集めている理化学研究所の生物言語研究チームリーダー。

この学者は、言葉の四つの条件として「発音を真似して聞き返す（発声学習）」、「単語を意味に対応して使う」、「単語を組み合わせて文を作る（文法）」、「社会関係の中で言葉を使い分ける」を挙げ、この四つの条件を全て兼ね備えているのは「人間の言葉だけ」と説き、その説を動物の観察、実験等から分かり易く解説している。

本書を読んで一番印象に残ったのは、言葉（音の繋がりである意味を持たせる単語）を発するのは動物（ヒトもヒトという動物の一種）の中で「余裕」ある種だけに観られるということ。

つまり、弱肉強食の自然界では、鳴き声を大きく、多く発することは敵に見つかる危険性が増すが、それに耐えうる強さがあるという「余裕」をメスに見せるためであり、それ故に感情の表出である「言葉のはじまりはラブソング」という仮説が成り立つよう。

自分の愚書「重い障害のある子どもへの援助：第3編 第1章 第7節」で、ヒトは音声や身振り、仕草を仲間への合図として使っていたが、火を手に入れたお陰で夜も仲間と一緒に過ごす「余裕」が生まれ、その時に何かを伝え合うためにより複雑な音声が必要となる課程で言葉が生まれてきたのではないかと、社会的側面からその理由に触れた。

やはり現代人の我々も、生物学的には「余裕」あってこそ人と話す気分になるということかな???